

Title	英訳本Gesta Romanorum (Harl.7333)における Inversionについて(その2)
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外国語大学学報. 1969, 21, p. 151-174
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80358
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英訳本 Gesta Romanorum (Harl. 7333) における Inversion について (その2)

金 山 崇

§ 4 特定の副詞や副詞句が頭位にある場合や、ある種の節の頭位にある接続詞に続く場合に、 転倒が見られるので,以下,個々に,どのような条件のもとで,この現象が起こるかを見ること にする。これらの副詞(句)は,先行文脈とのつながりを保つための接続詞機能をもつものが大 部分であって、それが惹きつけるものは述部動詞であるから、頭位に来る語句の次に続くのはど のような動詞か、また続く主語はどのような種類のものか、ここでは単独の述部動詞の場合を中 心に調べ複合動詞の場合は、最初の助動詞に必ずしも主語がすぐ続くとは限らないなどのことが あり、くわしくは別の機会にゆずることにした。なお次の(1)(2)(4)の場合は考慮に入れない。 《1)非人称構文,(2)通常の命令文(主格のない場合はもちろん,あっても必ず動詞に後続し,転倒 となるから)、(3) 頭位にある副詞や副詞句と述部動詞 (非転倒の場合は主語) との間に他の副詞 や副詞句が来れば、その頭位の語句が後続する主語・述部動詞の語順に及ぼす影響は、その介在 する 語句 のために非常 に薄くなる かまたは絶たれる,と考えられるので,その介在する語句を 頭位とみなし、その項で扱う (e.g. And thenne anoon he sent a messag to be Empresse (312)/And penne withowte dowte we shull ende faire(7)), (4)(3)と同様な情況だが介在す るものが分詞構文や従属節である場合(必ず非転倒である)(e.g. Thenne the Iuge hering his resonabill and his wise answeris, he(=the Iuge) myzt zeve no dome (11)/At pe laste, whenne be Emperesse sawe bat he wold not be corected, ne amended of his foly, she callid to hire iii. or iiii. worthi lordis(312)).

§ 5 §4に述べた副詞のうち、ここでは 'then'を扱う。転倒例は238件、非転倒例は334件で、比は42%に対し58%、と 2:3 の割合で非転倒になる率がやや大きい。非転倒例のうち、述部動詞が転倒例のそれと共通している件数は165で、これに限って 考えれば、 238:165, 59%と41%になり、先ほどの場合とちょうど比は逆の <math>3:2 となり、特定の述部動詞にあっては転倒になる率がやや大きくなる。先の334件より、この165件を引いた残りは 169 件で、これは転倒例のうちに対応する共通の述語動詞がないものである。以下、238:165の場合の対照的な例文(対照的な例が非転倒例中にないもの (0) (11) (12) もある)を挙げ、次に非転倒のみに現われる述部動詞を列挙し、最後に、これらに関する統計数字を表示して若干の帰結を見出したい。

(1) Then seid the Emperour to be lady, "goth ye forth...(83)/pen

- the Emperour seid, pat sat at the table, "sey, lorell knave...(80)
- (2) Thenne spake pe lewde knyzte, and saide, "sir he is gilty...
 (21) | Thenne pe wise knyzt spake, "If so be that pou wolt do...
 (20)
- (3) when he comyth to be deth with pacience, ben shall he be a kyng in heuen(71)/if ony woman, &c. scil. If ony sowle, be which is spouse of god trespassid in avowtrie, scil. In eny dedly synne, Thenne hit schuld be demyd to perpetuel prison of hell. (13—14)
- (4) And penne comith a toode(18)/But thenne pe serpent comyth agen, scil. our lord, whenne...(19)
- (5) when he takith no kepe of god, and hath no meyne, pan is hit to be man checkmate. (71)/then hit is no charge who be above or who be byneth(71)
- (6) Then answerid pe stiward, and saide(282)/Thenne she answerid, and saide(269)
- (7) then thought he, "I wote wele my felawe...(73)/& thenne she thowte, "lord! yf I wer now wher that I was to-day!"(188)
- (8) whenne we wer all childryn of perdicion..., Thenne sent god adowne his owne geten sone to delyuer vs (32)/And thenne Gwido sent down pe Roop agen. (283)
- (9) Then cryde the Emperesse with an hye vois, and saide (319)

 | Then she cryde with an hye voys, and saide (315)
- (10) And thenne lieth the yowth in derknesse of synne (8)
- (11) and thenne become the Empire into the hondes of his sister (256)
- (12) Then ros vp a grete tempeste (303)

上の例文に見られる述語動詞を列挙する。括弧内の数字は当該動詞と共に用いられた主語別の件数を示し、代名詞・名詞の順であり、上段は転倒例の、下段のは非転倒例のそれである。以下(13)(14)ではことに列挙する以外の非転倒動詞とその主語の別を示す。便宜上、現代綴字で原形を用いた。

- (b) 他動詞: answer(2—1), cry(0—1), say(70—104) (0—1), (6—0), (27—14), send : (0—1), speak(7—13), think(2—0) (1—5), (0—3), (3—1)
- (c) 複合動詞形 (v(s)Vなど)(7—6) (55—18)
- (3) 自動詞¹⁾: awake(0—2), blow(0—1), bow(1—0), die(0—1), enter(1—2), fight(2—0), fall(0—1), go(6—7)²⁾, grant(1—0), incline(0—1), kneel (2—2), look (4—0), marvel(0—3), meet (1—1), ride(2—0), rest(2—0), run(2—3), sorrow(1—0), start (0—1), turn(2—1), weep(3—2), write(0—1).
- (14) 他動詞: ask(4—3), array(1—0), begin(3—1), behold(1—1), bid(3—1), bequeathe(0—1), besiege(0—1), bring(1—2), bury (1—0), call(1—3), cast(1—0), charge(0—1), comfort(0—1), command(0—1), conclude(1—0), counsel(1—0), covet(1—0), deliver(2—0), draw(1—0), enquire(0—1), find(1—0), flee(0—1), forgive(1—0), give(0—1), grant(1—0), hang(1—1), hate (1—0), have(1—3), hire(1—0), hold (0—1), incline (1—0), know(1—0), lay(1—0), let(0—1), lose(3—0) make(2—4), nake (1—0)³, occupy(0—1), open(1—1), owe(1—1), pray(0—1), put(1—0), reprove(0—1), see(2—1), seek(1—0), sell(0—1), show(0—2), slay(2—0), smite(0—3), sue(1—0)⁴, stir(0—1), set(0—2), take (7—4), tell (1—3), trow (0—1), turn (1—0), wash(1—0), yield(0—1)

上の(a)(b)(c) の動詞例のみに限って、主語別に見ると、転倒例では代名詞86、名詞 139、複合動詞形 (v(S)V) では代名詞7、名詞6であり、非転倒例では、代名詞45、名詞47、複合動詞形では代名詞55、名詞18となる。また動詞の別に見ると、前者では自動詞24、他動詞201、複合動詞形が13であり、後者では自動詞31、他動詞61、複合動詞形73である。 このように見ると、say、speak、come、be、answer、think、send、cry、lie、become、riseが述部動詞のとき、主語が

¹⁾ 代動詞do (2-0) は除いてある。故に (13) (14) では自動詞59, 他動詞110, 計169 (実際は171) となる。なお, 便宜上原形を挙げ, 現代綴字になおした。また括弧内の数字は主語別の件数を表わし, 代名詞, 名詞の順であるのは(a)(b)(c)に同じ。

²⁾ 過去形 yede の場合も含む。

³⁾ nakid (=naked) の原形。

⁴⁾ sue=pursue.

代名詞(86:45) であれ名詞 (139:47) であれ、共に転倒に傾く方が大きいし、動詞は自動詞(24:36) ならば非転倒に向い、他動詞 (201:59) ならば転倒に向うことになり、又複合動詞形 (13:73) ならば非転倒に傾く、と言いうる。

しかし,(13)(14)を算入すれば,非転倒の部には代名詞87,名詞82,自動詞59,他動詞 110 が加わって,表1 のようになる。これに依れば,主語については,代名詞の場合に非転倒への傾き

	転 倒	非転倒
代名詞	86	132
名 詞	139	129
自動詞	24	90
他動詞	201	171

が大きくなり、動詞では依然として他動詞の場合に転倒へ向う 傾向が強いが、前の201:59ほどの著るしい傾きはなく、自動詞 の場合に非転倒となる傾向が前よりも大きくなっている。

ところで、次に扱う 'po' にも通じることで、伝達動詞'quod'は、常に主語に先行して転倒の語順を起こすことは §3 に述べたとおりだが、いま仮に、複合動詞形を除く単独動詞の転倒例

225 のうちで、伝達動詞の大部分(205件)を占める'say'と 'speak' を、'quod+主語' の型にならう傾向がある、またはこのテキストのひとつのマンネリズム(対話が多く用いられているからであろう)⁵⁾ と考えるなら、上の数字からこれらを別枠として引き去った方が、より真相に近く、転倒・非転倒の条件が見られるのではなかろうか、と言うことである。

そこで、'say' (174件,主語は代名詞:70,名詞:104) は全部他動詞として用いられているが、 'speak' (31件,主語は代名詞:9,名詞:22)) は自動詞用法は11件(主語は、代名詞:2,名詞:9)で、これを除いた残り20が他動詞であるから、174+20=194を引けば、上の表の転倒の他動詞は7になり、主語も代名詞は70+7=77、名詞は104+13=117をそれぞれ引き去れば、9と22になる。一方、'say'や 'speak' に非転倒例として他動詞用法があれば、上の 'quod+主語'の型またはマンネリズムに反しているわけだから、非転倒例からそれらを引き去る必要がある。 'say' 44件(主語は、代名詞 27、名詞17) は全部他動詞用法で、'speak' 4件(主語は名詞のみ

	転 倒	非転倒
代名詞	9	105
名 詞	22	109
自動詞	24	90
他動詞	7	124

で4)のうち自動詞用法 1 件を除く 3 件、がこれである。すなわち代名詞 27、名詞 17+3=20、他動詞 44+3=47 を除くわけである。表 1 の数字は表 2 のように変わる。

つまり、'then' が頭位に来る場合、'say' 'speak' という伝達 動詞を上に述べた理由から除去してよいとすれば、総じて主語 の別、動詞の別に拘らず非転倒となる傾きが絶大となる。ただ

⁵⁾ 話者が変わるたびに、その identity を明確に強 調できるよう、転倒の語順で後位に、主語(=話者)を置いていると考えられる。'say' 'speak' は次の例文に見るように、大部分は直接話法を導入するのに用いられ、'quod+主語'は、いったん導入された直接話法文が切れて、次に始まる中間に置かれるのが殆んど全部である。例: Then saide Fulgencius, "sir, I beseche you hertely to telle me soome goode conseil and helpe in pis cas." Thenne saide pe stiward, "if thow woll do after my conseil in pis cas, I shall bryng al to good ende." "jis, sir," quop he, "pat I desire nowe bifore all thinges." Thenne saide pe stiward, "… (323)

し名詞主語であり、述語動詞が自動詞であれば、なおいくばくか転倒に向う可能性があり、複合動 詞形であれば非転倒に向う傾向が強い、と言えるであろう。

複合動詞形では次のような興味深い文例が、ただ一つであるが、見出されたことをつけ加えておきたい。

例: but yf the holy gooste passe oute, & fle awey fro synne, pen is alle the see, scil. al the worlde, is trovbelid, & whi? (108)

つまり、'then' が頭位にあるのでいったん転倒の語順をとるが、主語を説明し直したために、助動詞is が先行しているにも拘らず、その説明用の語句を頭位にある主語として新しく陳述しなおし、本来、過去分詞 trovbelid が続くべきところに、'then' の影響を離れ不要な助動詞isを重ねることになったと考えられる。また偶然同一語句が近接した位置にあって、次のように「変化」を狙ったと考えられる相反する語順もある。

例: but when pe brid fleethe oute a-wey, then al pe see is I-troubelid... (7行おいて下に) & when she(=bird) perseyvithe hir (=the bird's enemy), she fleethe, & pen is al the see I-trowbelid" (106)

§ 6 'po'(=then) が頭位に来て起きる転倒と非転倒は、それぞれ18件、24件で、全体として、非倒置へ向う傾向がある。転倒・非転倒に共通して見られる述部動詞、およびそれと共に用いられる主語の別による件数を括弧内に示せば次のようになる。上段は転倒例での、下段は非転倒例での件数であり、代名詞・名詞の順である。

$$(2-0), (1-0)^{6}$$

$$(3-1), (0-0)$$

$$(1-0)$$

	転 倒	非転倒
代名詞	2	6
名 詞	13	1
自動詞	2	3
他動詞	13	4

次に、複合動詞形を除いて、これを表にまとめると、表3の ようになる。

これで見ると、主語が名詞で他動詞の場合に転倒へ傾くことになるが、'say' 'speak' については、'then' の項(p. 67)で述べたことがあてはまるとして"、ここでも同様の操作を加えると、表 4 となり、主語が代名詞である場合に転倒に傾き、自動

⁶⁾ 過去形 yede を原形にしてある。

⁷⁾ po quod the kyng, "it is good… (50) も参考になる。

	転	倒	非転倒
代名詞		1	3
名 詞		1	0
自動詞		2	3
他動詞		0	0

	転	倒	非転倒	TA S
代名詞		1	11	
名 詞		1	8	
自動詞		2	8	
他動詞		0	11	

詞の場合は非転倒へ向うと言える。ここで更に転倒例中に相対 応する動詞をもたない非転倒例を加えると表5のようになる。 まずその動詞を§5の要領で列挙する。

- (4) 自動詞: descend(0—1), draw(0—1), fall(1—0), turn(1—1)
- (5) 他動詞: ask(1—0), begin(1—0), have(0—1), make(0—2), marry(1—0), proffer(0—1), take (1—1), think(1—0), wed(1—0)

つまり、伝達動詞 'say' 'speak' が 'quod+主語'の型、またはこのテキストのマンネリズムと考えてよいのなら、'po' が頭位に来た場合、数量的には圧倒的に非転倒に向うものとしてよいが、なお詳しく言えば、主語が代名詞で、動詞が他動詞の場合に非転倒に(逆に言えば名詞主語で自動詞の場合に転倒に)向うと言えるであろう。更にまた、複合動詞形にあっては、転

倒と非転倒とは同率と言える。参考までに対照的例文を挙げる。

表4

- (1) Tho seid the Emperour, "doughter, ... (49)/And tho he seid to the thrid doughter, "how moche lovist pou me?" (49)
- (2) and po was all the list agon(8)/tho he was browte to him(190)
- (3) And poo come the thirde knyght, and spake, "...(93) | Tho he cam to be secund(48)
- (4) Tho went he agen to his lond (91)/and po he yode to the cradill(99)
- (5) Tho spake be wise man, "loo!...(20)

§ 7 頭位に 'there' が来た場合に続く be+不定主語は、枚挙にいとまがないくらいであるから数えない。その他の動詞のときの転倒例は、93件、非転倒例は41件である。転倒例の頭位に来る 'there'は例外なく、いわゆる虚辞と見なしてよいものであるが、非転倒にあっては、'there' はすべて「場」の意味をもつ、という違いがある。前者では、主語は名詞90・不定代名詞 (none) 3、後者では代名詞40で名詞は1に過ぎない。動詞については、前者では自動詞が66、他動詞はわずか2、複合動詞形は25であり、自動詞と複合動詞形の占める割合が圧倒的である。後者では、参考までに述べれば、自動詞7、他動詞30、複合動詞形4で、他動詞の占める割合が大きいが、これはこのテキストだけで見られるのであって、他の動詞(形)が逆に多くを占める場合も表現手段の必要度により考えられるわけである。ただ、偶然かも知れないものの、後者に代名詞と他動詞が多く現われていること、前者に名詞と自動詞が多いこと、は転倒になる条件として、これまで

扱った 'then', 'po' の場合と一致してるのは興味深く感じられる。参考に例文を掲げる。

- (1) 転倒例: Rome, In the empire of whom per was a kny3t pat hadde weddid a ...(1)/Whan he was ded, per come a kny3t, and spoiled me of my virginite(23)/Whenne the Emperoure harde pat, anon per toke him an infirmite (250)/the kny3t was so mury in herte, that per cowth no man telle it (265)/when pe day come, ther was ordeynyd a grete feste (272)/if we set fire in pe cite, anon pere shalbe made a cry (63)/at the last pere was oon yfounde ... pat was sotill in crafte (67)/"sipe ther is non pat wolle seye it, ne noon accuser is I-founde, pere shalle noon be dede(155)
- (2) 非転倒例: he Enterid in to your foreste, and pere pe forster kit of his tayle (150)/he lokid afer, & pere he sawe a fair place; and thidir he went & set him adowne in the myddis perof. And as he was ther sitting, ther come two faire ladijs (114)
- § 8 頭位に 'here' が来て転倒する例は多く,動詞はは自動詞で主語は名詞または修飾語句のついた比較的長い場合に限られる。非転倒例は 9 件,主語は全部代名詞,動詞は参考までに述べれば,自動詞 2,他動詞 2,複合動詞形 5 である。ここでも 'there' とよく似た傾向が転倒の条件について見られる。例文を挙げる。
 - (1) 転倒例: Here is my sone (46)/heere been nowe but we two (322)/here stondith at pe gate a poore man (284)
 - (2) 非転倒例: here it is (181)/here he sendeth the lin cloth (171)/here I have spokyn with a kyng (38)
- § 9 'after' が頭位に来て転倒の起こる場合が2件, 非転倒21件で, 圧倒的に非転倒に向うが, 前者では名詞主語に自動詞が用いられ, 後者では主語に代名詞12, 名詞5, 動詞には自動詞11, 他動詞6, 複合動詞形4 (代名詞2, 名詞2) となっている。これは表6のようになる。

		転	倒	非転倒
代名	咨詞		0	12
名	詞		2	5
自頭	肋詞		2	11
他動詞			0	6

つまり、大勢として、'after' が頭位にある場合非倒置に向う ことになるが、なお名詞主語で自動詞のときわずかに転倒する 可能性がある、と言える。例文を掲げる。

- (1) 転倒例: but thenne aftir come an Erle (216)
- (2) 非転倒例: After he goth to his owne paleis(86)
 /Sone after pe stiward went to pe childe (323)/

Aftir pe maister of pe Shippe wolde haue layn by the lady (88)

§10 頭位に 'afterward' が来た場合の転倒例1, 非転倒例10で, 'after' 同様, 非倒置への傾向が圧倒的である。前者で, 主語は名詞で自動詞を用いてあるが後者では代名詞3, 名詞3, 自動詞4, 他動詞2, 複合動詞形4(名詞主語4)である。これは表7となり, 'after' 同様, 大勢

	転	倒	非転倒
代名詞		0	3
名 詞		1	3
自動詞		1	4
他動詞		0	2

は非倒置であるが、名詞主語、自動詞のときに、わずかに転倒 する可能性があることになる。

- (1) 転倒例: then sone aftirward was the day of the nativite of the Emperour (105)
- (2) 非転倒例: Aftirward he comyth to be hous of be Erle (86)/afterward bei toke him (179)/Aftirward

the sone was I-made a knygt (262)

§11 頭位の 'anon' では転倒・非転倒の比は1:54で, 転倒する割合は僅少である。前者では名詞主語,自動詞で,この自動詞と共通の動詞 (come)で,名詞主語を用いた対応例が3件後者に見出されるの見ても,転倒の可能性が薄いことがわかる。後者では,代名詞30,名詞19で,述部動詞は,自動詞13,他動詞36,複合動詞形5(代名詞3,名詞2)である。つまり名詞主語,自動詞の場合に,ごく僅かに転倒の可能性が残ることになる。これは§§9,10にも見られたことである。

	転	倒	非転倒
代名詞		0	30
名詞		1	19
自動詞		1	13
他動詞		0	36

表8

- (1) 転倒例: Anon come hir syster sothefastnesse (133)
- (2) 非転倒例: anon the lion come (116) / anon the lady come ny (117)/and anon a Grehound, pe which he had lovid moche afore, come wyghtly rennyng to him. (79)/anon he fond a hous of

marbill (7)/anon the yatis shulbe shit (63)

\$12 'not' が頭位に来て転倒する例が 1 件, 非転倒は 0 である\$'。代名詞主語で他動詞でありながら転倒しているのは, 他の副詞(句)とちがい, 動詞との結びつきが強い否定語であるからだろう。

転倒例: While I suffre and am in sekenesse, I woll lede pe life of religion, and of goode Rule, but while I was withoute such thraldom and sekenesse, *not lovid* I such life (271)

⁸⁾ ちなみに、I shuld haue be robbid & yslayn, *ne had* my hound *ybe* (=but for my hound) では、 否定詞 ne のために転倒しているのではなく、仮定文として接続詞を欠く場合、転倒になるからである。 cf. § 1.

§13 'now'に続く転倒例は11, 非転倒29で、やはりこれも非転倒への傾きが大きい。前者に用いられた動詞be1件に対し後者では同じ条件のものが6件あるのもこの傾向の強さを感じさせる。前者の主語については、代名詞2、名詞1、後者で代名詞9、名詞8、動詞では、前者において、自動詞2、他動詞1、複合動詞形8(代名詞7、名詞1)、後者では、自動詞9、他動詞8、複合動詞形12(代名詞9、名詞3)である。これは表9となり、代名詞主語で自動詞という

	転	倒	非転倒
代名詞		2	9
名詞		1	8
自動詞		2	9
他動詞		1	8

条件が、わずかに転倒へ向う可能性をもっている。そして複合 動詞形は非転倒への傾きを大きくさせる、と言える。

- (1) 転倒例: A! der moder, now is woo to yow I-nowe (231)/now go I oute of the empire (45)/
 "now know y⁹ wele, pou canst thi pater-noster perfitly (73)/now haue I lost wif and childeryn(89)
- (2) 非転倒例: and now he is dede (253)/Nowe the lawe was pat time, that eche woman shuld go to chirche (276)/& now I am feble (45)/Now oure fadir yede a pilgrimage (232)/Now pin fadir is absent(231)/now he wolde sle me(220)/Now an obstinat man woll not take hede (275)
- \$14 'rather' で転倒例1, 非転倒0である。名詞主語で複合動詞形が用いられている。 転倒例: *Rathir shalle* the sowle *parte* from my bodye or I lese hit." (185)
- \$15 'sometime' で転倒例1, 非転倒0である。名詞主語で自動詞が用いられている。 転倒例: "Some tyme is such holiyng and perforacion goode. (10)
- §16 頭位に 'therefor(e)' が来ての転倒例は31, 非倒置は171である。 前者では代名詞 0, 名詞27, 後者では代名詞85, 名詞24であり, 述部動詞は, 前者で自動詞 0, 他動詞27, 後者でそれぞれ27, 82である。複合動詞形は前者で4(名詞4), 後者で62(代名詞54, 名詞8)である。 ここでも, 興味深いことには, 'then' 'po' の場合と同様に, 伝達動詞 'say' 'speak' の用いられた転倒文の多いことで, 転倒例中, 複合動詞形を除いて他動詞は全部これらの動詞なのである(say: 26, speak: 1)。 そして用いられる文脈は, すべて同じで, 下に掲げる転倒例の最初に見られるものである。これらの動詞は, 非転倒例中には, 同じ文脈で, わずか3件にすぎず10, この

⁹⁾ この 'y' は ye ではなく一人称単数人称代名詞である。全テキスト中,この綴字はここの一件だけである。

¹⁰⁾ 同じ say でも,他の7例のうち6例は文脈が異なる。例: and, perfore, sir I say pat he is cause of my deth. (21) / and perfor I say, sate vp a cler myrrour…(241) 残りの1例は次頁の例文中にある。

therefore+say+名詞主語は、ひとつの formula (ありがたい聖書・聖者のことばを引用するのだから、話者をはっきりさせるため強調の後位に主語を置いたのであることは明らかであるが、 'then' 'po' の場合に比べて、この formula から逸脱する割合が少いのを見ても、前者の場合と違う特別な意図、感情がこめられていると、考えてよかろう)であると考え、別枠にして考えれば、どうであろうか。別枠のものを合計より除き括弧でくくると、表10のようになり、'therefore

	転 倒	非転倒
代名詞	0	85
名 詞	0(27)	21(3)
自動詞	0	27
他動詞	0(27)	79(3)

+say (speak)+名詞主語+聖書引用句'以外は、複合動詞形を除けば、すべて非倒置に向うことになる。そして複合動詞形についても、圧倒的に非倒置へ向うことになる。

(1) 転倒例: pe firste norise, that is sette to wasshe pe childe, is contricion, the whiche wasshithe awey synne of man; & perefor seithe Ambrose,

Lacrime lavant delictum Quod pudor est Confiteri, ¶ This is to sey, teris was shithe synne that is shame to be shewid (100)/and pere for spekithe seint Iame Apostle, Religio munda et ...(249)/ and perfore was made grete sorowe in pe cite (11)

(2) 非転倒例: perfor Holy Writ seith thus, ¶ Dic vbi sunt potentes ...(57)/perfor salomone seiyth this, Ante hominem mors et vita... (304)/per for he(=christ) saide, Tanquam ad latronem existis... (179)/And therfore the Emperoure Spake to him, and saide(136)/and perfor it is wreten, ¶ Ierem. iii tu autem...(222)

§17 'thereof' が頭位に来る場合の転倒は7, 非転倒1である。ここでも 'therefore' と同様な 'formula' が前者で3件見られる。一応全体として見ると, 前者で代名詞0, 名詞4, 動詞は, 前者は自動詞1, 他動詞3(全部 say)である。複合動詞形では, 前者は3(名詞3),後者1(名詞1)である。'formula' を括弧でくくると表11のようになって, 名詞主語で自動詞, または複合動詞のとき, 転倒に傾くと言える。

	転 倒	非転倒
代名詞	0	0
名詞	1(3)	0
自動詞	1	0
他動詞	0(3)	0

- (1) 転倒例: pe drynk is noute elles but passion & penaunce; & pere of seithe oure sauiore pus, Potestis bibere calicem quem Ego bibiturus sum... (107)/I was infecte with lepre, And per of com from me so abhominabil stench(326)/pere of was nothing I-spoke (163)
- (2) 非転倒例: and perof this knyght, maister of pe ost, was hily gladid (89)

§18 'thus' の場合, 転倒例2, 非転倒例は4である。前者では, 複合動詞形(代名詞1, 名詞1) のみが見られ, 後者では主語に代名詞4, 名詞0, 動詞は自・他それぞれ2であり, 複合 動詞形はない。代名詞主語のとき非転倒に傾き, 複合動詞形では逆に転倒に向う, と言える。

- (1) 転倒例: And thus shall the voyse thretin him (218)/And thus may 3e welle preve...(323)
- (2) 非転倒例: and thus he fulfillid his service (105)/And thus she become the spouse of Criste (172)

\$19 'tomorrow' で転倒例1, 非転倒0であり, 名詞主語, 複合動詞形を用いている。 例: "tomorow shall be a turnament (263)

§20 頭位に 'wel' が来た場合, 転倒, 非転倒例はそれぞれ2, 1である。前者では代名詞0, 名詞1, 後者では代名詞1, 名詞0であり, 動詞は前者で, 自動詞0, 他動詞1, 複合動詞形1 (名詞1), 後者では他動詞1である。この双方に現われる他動詞は同じ 'wit' であることからも, 名詞主語と他動詞または複合動詞形で転倒に向う, ということになる。

- (1) 転倒例: wel wiste youre fadir what he ment (169)/and wel may the worlde be I-callid pe wyf of pe devil (97)
- (2) 非転倒例: Wel I wote, pat ...(73)

\$21 'whereof' の場合, 転倒・非転倒例はそれぞれ1, 0 であり, 前者は名詞主語, 他動詞である。そして 'thereof' の formula と同じと見てよい文脈に用いられている。

例: pe hounde, pat is ... is the tong of a good Cristen man, pe which praieth continuelly, like a berkyng hound: wherof seith holy Writ, Breuis oracio, scil. iusti penetrat celum (47)

§22 'yet'の場合,転倒・非転倒例は,それぞれ4,18で,非転倒への傾きが非常に大きい。 前者では主語に,代名詞2,名詞0,後者では代名詞9,名詞1であり,動詞は前者では自・代 動詞各1づつ,複合動詞形2(名詞2),後者では,自動詞3,他動詞7,複合動詞形8(代名

	転 倒	非転倒
代名詞	1	9
名 詞	0	1
自動詞	1	3
他動詞	0	7

詞 6 , 名詞 2) である。前者の動詞中,自動詞 1 は be であるが,後者では be が 3 件あるのも非転倒への傾きが大きいことをうかがわせる。代動詞 do を除いて表にすると,左(表 12)のようになる。

つまり、代名詞主語で自動詞ならわずかに非転倒に傾く、また複合動詞形も同様であると言うことができよう。

- (1) 転倒例: yf he had had an herte, he wolde have thowte on that lost; but yit dude he not (150)/ (王が息子に向って最も怠惰なものに王国を譲ると宣言し、第一子が自分が怠け者である事実を述べる、続いて) "Nay," quod the secounde, "yit am I mor worthi thanne thow (239) / "Neuertheles zit shalt pou not fynde me a foole. (38) / poz…zit is violence y-made to pe lord of pe hous (10)
- (2) 非転倒例: pog...git pou didst violence to pe dede (10)/& yit she is euermore contrary to my will (46)/and yit she was modir of both (90)/If...git pou shuldist haue grace (312)/pog...git pei acusid him to pilat (11)

\$23 'as long as', 'as soon as', 'as often as' と相関的に用いられて, 主節の頭位に来る as, 時にsoが形容詞や副詞を直後に惹きつけることがある (as long ...; as sone ...; as oft (times)

	転 倒	非転倒
代名詞	0	2
名 詞	2	2
自動詞	2	4
他動詞	0	0

- …など)。その場合、転倒・非転倒はそれぞれ4件、7件である。主語・述部動詞については表13のようになる。ただし、複合動詞形は前者では2 (代名詞1,名詞1)、後者では3 (代名詞3)である。これによって、名詞主語で自動詞の場合にかなり転倒する傾きがあり、そして複合動詞形ではやや非転倒に傾くことが多いと言える。
- (1) (非)転倒例: as long as a man lokith in a myrrour, as long is pe ymage of him in his sight, but as sone as pe visage is fro the myrrour, as-sone pe sight of pe ymage goth awey. so by hem; For als long as pe pouere man hath a good purs, as long thei woll help, but as sone as pe purs faileth, pei fleeth, and wol not be yhad (58)/as long as ... as long may the man passe Restfully by this world (108)/as long as ... so long she was vnkaught (70)/as ofte as she was I-temptid ... as ofte she yede and lokid (228)
- §24 §23で扱った以外に、'so' が頭位に来て転倒が起こる場合が32件、非転倒は190件である。全体としては、圧倒的に非転倒の方向に赴くことは明らかであるが、意味・用法によって、ほぼ六つに分けられると思う。次の区分内で、括弧内の数字は、転倒・非転倒の順に並べた件数である。
 - (1) 「上に述べたような状態(のまま)で」(1-0)。

- (2) 「と同様に(ならって)…も」の意味で、as...so、sith...so のように相関的に用いられたり、あるいは意味の上で、先行する等位節などがこの 'as...' の節に相当するものであり、便宜上二つに分ける(22—17)。(a)代動詞 do や、先行の文脈から省略されたものの推測が可能な助動詞と共に用いられるもの(12—0)。(b)ここには(a)のようにso が代名詞的性格を帯びず、副詞としての働きがより明確なものを含めた(10—17)。
- (3) (2)が「相応・類似」を表わすものであるのに対して、ことには、むしろ「同一」を表わすもの、命令・願望などがその通り実行されたことの表現がそうである(3-23)。
- (4) 「だから」「そこで」と理由、結果を表わすもの、と「そうすることによって」と 条件を表わすもの(6:122)。このほかに非転倒例しかもたないものが二つある。
- (5) 「それほどに」(0-1)。
- (6) 自動詞'hap' 'fall=(befall)' や like と共に用いられるもので後続の 'that 節' など に相応じるもの(0-13)。

まず(1)では、名詞主語に自動詞が用いられている。非転倒の例はないのだから、このような条件のもとで、転倒に向かう可能性が大きいと言える。

(1) (一匹のひきがえるが騎士に復讐せんと、寝所に入りてみ、胸にとりつき騎士の生気を吸う。目をさました騎士は、家来の助けをもってしてもこの悪魔を除けず、我が命も終りか、と嘆く) And so sat pe toode alle pat gere, and seeke his blood (5)

(2)(a)でも非転倒の例はないから、転倒例についてついて述べれば、転倒の可能条件を示すことになるであろう。動詞は代動詞 do が8(代名詞 3、名詞 5)で半数以上を占め、いわゆる「本動詞」の省略された助動詞が3(may, shall, has)、助動詞(must)+代動詞 doが1で、主語は4件とも代名詞ある。主語を強調するために後位に置いて対照的効果を出させるのであろう。動詞部が弱くてもそれは代動詞などが多く用いられていることからわかるように、すでに先行する文脈で意味内容が述べられており、強調して繰り返す必要がないからであろう。

(2) (a)I see wel, and so may 3e, that ...(20)/as pou wilt defende pe by thi strength, so shal I me by my wisdom (55)/as the body liuithe by kyndly mete, Right so dothe the sowle by gostly mete (100)/the pekok goth lik a thef, and so do pei (59)/he 3ede aboute the Empire, and so most pou do, scil. go aboute the doynge of diverse werkes of mercye (147)

(2) (b) この場合には非転倒に大勢として傾くことは明らかであるが、まず前者では主語に代名 詞 4, 名詞 2, 後者では代名詞・名詞はそれぞれ 9 と 3 であり、 動詞は自動詞 (be) 2, 他動詞 4, 複合動詞形 4 (代名詞 3, 名詞 1) が前者で、後者は、自動詞 (be) 9, 他動詞 (dispose, quench, restore) 3, 複合動詞形は 5 (代名詞 2, 名詞 3) である。自動詞beについては、前者

で代名詞主語と共に用いられたのが1件,に対し後者では同じ代名詞主語でありながら6件ある こと,またこの動詞が名詞主語で用いられたのは前者後者とも同じ1件ずつであることは,非転 倒への傾きの大きさを示すものであろう。

	転 倒	非転倒	表
代名詞	1(3)	9	14
名 詞	2	3	
自動詞	2	9	
他動詞	1(3)	3	

表14で見ると主語が名詞より代名詞のときに非転倒に向う傾向が強く、動詞では、自動詞が優位であるが、転倒の4件の他動詞のうち3件 has 1件のほかが実は owe to+Root の owe が代名詞主語に先行しているのであって、他動詞にはちがいないが、後の 'ought to' が発達して来るのと相通じており"、一種の助動詞とみなすこともあながち無理ではない、と考えれ

ば、これを引き去って他動詞1(括弧内はoweの件数)とした場合、他動詞より自動詞のときに わずかに非転倒に向かいやすい、逆に言えば名詞主語・他動詞で転倒に傾きやすいと言えるであ ろう。また複合動詞形においてもやや非転倒に向うと言える。

- (2) (b)転倒例: Also as focus lent to his sone oper ij d, Rizt so owe we to zelde to pe sone of goode will and meretory workis (32)/quod the emperour, "pat were impossible me to do." "So were pat oper impossible for me," quod he(66)/they wer worshipfully Reseyvid, but so wer not yowr [enmyes (105)/as ..., so is penaunce hard in sufferyng (146)/Right as a thinge is Raysid from pe erthe by hongynge, Right so is the synfulle Raisid fro synnys to god (146—7)
- (2) (b)非転倒例: as the see Ebbithe & Flowithe, so pe worlde is now Riche, now pore, now hole, now seke (108)/As my fadir hape ordeynid the kyngdom to me, so I dispose hit to yow(156)/right as it is hard to passe a depe water withoute a brig, So hit is hard to be saved withoute faith(41)/As water quenchithe fyr, so almisdede quenchithe synne (120)/as pe wif is weddid ... & may not departe, save only deth, So pi flesh may not be departed fro thi bonys, but by violence(34)/pe more he drynketh, pe more he thirsteth. And so hit is of worldly goodis, for pe more that a man hath of hem, pe more he covetith (64)

(3)について、転倒例では、主語は3件とも代名詞であり、非転倒例では代名詞7、名詞3である。動詞は、前者で so を補語的働きにさせている be, 目的語と考えてもよい働きにさせている

¹¹⁾ OED の OWE の項5, および OUGHT 5b.

do と say の 3 件であり、後者では、同様な be 1 件 (代名詞 1) とdo 9 件 (代名詞 6, 名詞 3)、複合動詞 (過去分詞が文脈より推測できるから省略してある 1 例も含めて) 13 件 (すべて代名詞主語で So it was (done) の形をとる) である。言うまでもなく、(3)では 非転倒への傾きが大きいことは明らかであるが、転倒例中 be や say と用いられた so には文脈からして他の転倒・非転倒例に見られない感情要素が入っており、またこの両者とも地の文でなく、被伝達文であることも、これらを別枠にして考えてよい根拠になるように思える。従って(3)では、転倒の 1 例 (so dude he) 以外は非転倒が原則的であると言ってよいであろう。

(3) 転倒例: & yit she is euermore contrary to my will, & so is non but she." (46)/The ferthe honoure was, pat he shulde sitte at the table with the Emperour, and so dude he; he sat in the temple of Jerusalem (178) (heは三つとも同一人物を指す)/"So sey I not to the." ('so' は先行する別人の話の内容を指す)

非転倒例: And thenne pe stiward was glad, and saide, "Late-downe the corde;" and so he dude./false wrecche, pou shalt ... be hongid in ..., he shall haue ... pi londis, and be stiward in pi stede." And so it was in dede, for pe stiward was y-hongid, and Gwido was set in his stede (290)/aftir my deth, she shall haue myn empire." & so it was ydo in dede (52)/then the lady seyde he shulde be dede; & so he was in dede(175)/the Emperoure ... seide to his centurio, pat he shulde fecche that kny3t, to torment to be demid and dampnid. and so he was. (241)

(4)「だから」と「そこで」とは必ずしもはっきり区分できない場合があるし、単に話題をおこす手段にすぎないこともあるので、これらをひっくるめて扱うが、ここでは、他のこれまでのどの区分よりも非転倒への傾きが大きいと言える。転倒例にあっては、代名詞1、他動詞(think)1で、他の5件は複合動詞形(代名詞1、名詞4)である。非転倒例では代名詞62、名詞27、動詞は自動詞45、他動詞44、複合動詞形33(代名詞18、名詞15)である。複合動詞形の場合にごく僅か転倒する可能性があると言える。また他動詞 think を用いたものが転倒しているのは、その文脈では'so'はほぼ 'then' に等しいし、'Represented Speech' の一種を目的語としている('then' では 'Reported Speech' が目的語)点からも、'then' に現われた think の2例(§5 (7))と同じ一つの型とも考えられて、別枠にすることも可能であることを付言しておきたい。

(4) 転倒例: he saide, "I aske pe Ien of alle the men pat seye my fadir turne the playse, pat pei be pikid oute." & so thowte pei on aftir anoper, yf I sey so, myn yen shul be pikid oute. (154) / Resone, whiche is gostlye medisyne, is I-browte a-yene by the

werkes of mercy, and of consciense, & so is man I-helid (234) / (混合例) The serpent, scil. pe devil, woundipe the grehounde, scil. Resoun, ...; & So is pe blode [sperkelid aboute the cradil, when pat pe vertus, pe whiche thow toke in baptisme, be depressed & destroyed by the devill; & so pe cradil is tornid vpsodowne, scil. to the erthe (100)

非転倒例: perfore it is beste that she late some leche dele with hir, that she wold triste in; & so she may & shalle be hole. (234)/(リア王の話) the Emperour had no place to abide ynne; So he wrote letres, ... to his first doughter (50)/he lesithe his soule by synne, & puttithe it oute from the palys of hevene, and so it goth fro dor to dor, as a corrupt and a filid virgine. (145)/she tooke me to husbond; and so we have levid ever ... with Ioy and prosperite. (272)

(5)では代名詞主語に他動詞,(6)は代名詞主語13,自動詞13である。

- (5) I borowed for thi love swich a some of mony ..., so hily I sette myn herte in the."(161)
- (6) So hit felle in a tyme, that ther was a tiraunt namid Pompeius (219)/And so it was or tyme pat pe feste was don, alle echon wer made his frendes. (105)/So hit was, pat the Emperour entrid in to pe halle. (83) / the which emperour had thre doughters. So it likid to this emperour to knowe which of his doughters lovid him best (48)

§25 このテキストで、頭位にありながら、転倒を起こしていない副詞は次の通りである。先行文脈をうける nevertheless や他の散発的なものは別としていわゆる「文修飾副詞」の件数が、比較的多いのは、これまでに扱って来た副詞と異なり、先行する文脈とのつながりが比較的に薄く、前者が「前向き」の副詞とすれば、これはむしろ「後向き」のそれであるからであろう。なお括弧内の数字は件数を示す。

also(25); certainly(12); doubtless(9); eke(1); (or)else(12); ever(5); fair(1); falsely(1); far(1); first(2); forsooth(16); forth(1); forthwith (1); grievously (1); highly (1); iwis (=certainly) (1); much (1);

nevertheless(21); notwithstanding(1); offttime(s)¹²⁾(9); outward(1); suddenly(1); someday(1); soon(10); soothly(=truly)(20); sore(1); thereby(1); therein(1); thereto(4); therewith(1); unnethe(=hardly) (2); verily(1); wherefore(2); yesterday(1)

※26 ここでは二語以上で綴られているが、意味上、普通の句よりはまとまりをなしていて転倒例のあるものを扱う。すべて「場所」を表わすものである。前項の中にある、forsooth、oft-time(s)、therein、thereto、therewithなども二語で分けて綴られていることもあるが、転倒例がないことを、ことわっておく。(1) 'hereby' 転倒例1 (名詞主語:自動詞(run))。非転倒例0 (2) 'here beside' 転倒例3 (名詞主語3:自動詞3 (be, be, lie))。(3) 'here nigh' 転倒例1 (名詞主語:自動詞 (dwell))。(4) 'there beside' 転倒例1 (名詞主語:自動詞 (dwell))。(5) 'within' 転倒例2 (名詞主語2:自動詞2(be))。(6) 'without' 転倒例1 (名詞主語:複合動詞形)。これらをとおして言えるのは、'there' 'here' の場合と同様で、主語は必ず名詞、動詞は自動詞か、複合動詞形で転倒しているということである。ただし、複合動詞形では代名形主語も当然起こりうる。

- (1) her by Rynnithe smale litle hogges (209)
- (2) "her be syde is my castelle(220)/"Here beside," quop he, "lieth a knygt ded,...(9)
- (3) here ny duellith a knyst (76)
- (4) There beside duellid an heremyte (81)
- (5) and with Inne was but dede bonys (305)/And with Inne ben nothing but dede bonys (305)
- (6) And with oute was sette pis scripture, thei pat chese me, shulle ...(300)

§27 ここでは、頭位に副詞句が来て、転倒になる場合を扱う。転倒・非転倒はそれぞれ79件、 363件で非転倒への傾きは圧倒的である。複合動詞形の場合((転倒:34 (代名詞0, 名詞34。非 転倒118 (代名詞103, 名詞15) を除いて、まとめると、表15となり、どの条件も非転倒への傾き

	転 倒	非 転 倒
代名詞	0	179(代動詞の主) 語1を除く)
名詞	45	65
自動詞	44	105(代動詞do 1) 件を除く
他動詞	1	139

を指すが、主語については、代名詞の場合には100% 非転倒になるのに対し、名詞では41%が転倒に向うことがわかるし、動詞については、他動詞の場合、100% に近く非転倒に傾くが、自動詞にあっては、先の代名詞主語に対する名詞主語の割合ほどではないが、やはり30%が転倒に傾くことになる。つまり、複合動詞の場合は、圧

^{12) §23} と異なり, as や so と共に頭位に来ていないものである。 13) 12)に同じ。

倒的に非転倒に向かうが、単独動詞の場合、名詞主語で自動詞のときに転倒があることになる。 また複合動詞形のうちで、転倒例34件中16件までは、'Moralite'に現われる同じ表現で(e.g. By pe Cite in pe Northe is vndirstond Helle(22)) 一つの型であるから、これを別枠にして 考えとすれば、複合動詞形で非転倒に向う傾向は更に大きくなる。

さらに、'then' の場合のように、複合動詞の場合を除いて、転倒例と非転倒例に共通の動詞と同種の主語をもつものを対比すると、次のようになる。括弧内は、転倒・非転倒の順に並べた件数である。なお、転倒例は、複合動詞の場合を除いて、主語が全部名詞であるから、非転倒例からの算出もこの主語に限ることは言うまでもない。

- (1) 自動詞: be(22-6); come(8-8); dwell(2-1); enter(1-0); fall (2-0); go(1-1)¹⁴⁾; lie(2-0); play(1-0); reign(1-1); speak(1-1); stand(3-1)
- (2) 他動詞: speak(1-0)15)

これで言えることは、be で名詞主語の場合には、明らかに転倒に傾く割合が大きいということである。参考に、代名詞主語と用いられた上の諸動詞の件数をあげておく。

- (1) 自動詞: be (17); [come(7); dwell(1); enter(1); fall(4); go(5); lie(3); play(0); reign(1); speak(2); stand(0)
- (2) 他動詞: speak(0)16)
- (1) 転倒例: and on his body is good armour (9)/in this hard cas come pe forsaid knyght Gerinaldus (43)/and in hir house dwelte a serpente of longe tyme (242)/and by this wyndwe enterith an Egle, scil. the power of god, which ...(267)/seven sithes in pe day fallith pe rightwise man (74)/And by pis wey goith many (22)/bisede the cradell lay the sarpent dede (99)/at this play pleieth vj. men. (71)/and aftir him Reignid the sone (225)/But a-yenst suche a man spekith scripture, and seith thus, Maledictus homo ...(320)/Of that serpent spekithe moyses thus, Fac serpentem ...(244)/and azenst hit stod a man (7)/and vp on the finger was wretyn wordis percute hic (7)/and every nyzt was lizt brennyng there in a lampe(314)/ a lawe, that aftir a dome yevin shulde be no mercye or grace (242)/than in the day of dome shalle the

^{14) &#}x27;yede' の形で出ているものである。

¹⁵⁾ 同じ意味・文脈で用いられた 'say' は2件ある。

¹⁶⁾ 注15) と同条件の 'say' は7件ある。

wikid cook, scil. the devil, stonde aduersarie ayenste vs(152)¹⁷⁾ [(2) 非転倒例: And alle that nyght pes thre were in gladnes. (90) | In a tyme pis sonne come to him(128) | And in al this tyme the Empresse dwellid with hir dowter (212) | aftir his going, a damsel, that was the ladies sarvaunt, yede preveli (227) | aftir pe deth of the emperour the yongist doughter regned in his stede (52) | at pe laste the knyzt spake, whenne he had long leyne, and saide ...(254) | in pe last day of hem pe maide stoode in a wyndowe (38) | so in a certevne tyme the wyf of the Emperour saide to him, "sir, ...(237) | and in pe thirde day he rost fro his deth (11) | after pat pe serpent was no more y-seyn (6)

§28 ここでは関係詞節内で転倒の起こる場合を扱う。転倒・非転倒はそれぞれ, 25件, 115件で, 非転倒に傾くのは明らかであるが, 詳細に見てみよう。前者において, 主語は, 代名詞 0, 名詞23, 後者で代名詞34, 名詞31であり, 動詞は, 前者, 自動詞21, 他動詞(say)2, 複合動詞形2(名詞2), 後者では自動詞30, 他動詞36, 複合動詞形50(代名詞29, 名詞21)である。

	転 倒	非転倒
代名詞	0	34
名詞	23	31
自動詞	21	29
他動詞	2(18)	36

つまり大勢は、非転倒であることは先に述べた通りだが、代名詞主語にあっては100% 非転倒に向うことになるのに対し、名詞主語では過半数とまで行かずとも、43%が転倒に向かうことがわかる、また他動詞では非転倒に圧倒的に傾くが、自動詞の場合、ちょうど代名詞に対する名詞主語の関係と同じ位(42%)転倒に向かうと言えよう。複合動詞形にあっては、非転倒

に傾くことがはっきりと見てとられる。

転倒, 非転倒に共通の勘詞で, 前者は名詞主語しかないから, それに限って拾い出してみると, 前者でbeの占める割合が, 23件中14件を占めるのに対し, 後者では31件中わずか6件にすぎない ことから自動詞でもbeの場合は特に転倒に向いやすいことがわかる。以下は, そのような共通動詞を列挙したものである。括弧内は, 件数で, 転倒・非転倒の順である。

(1) 自動詞: be(14-6); come(4-4); dwell(2-0); enter(1-1)

(2) 他動詞: say(2-0)

参考に、代名詞主語についても、このような動詞を拾い出すと次のようになる。

自動詞: be(4); come(2)

^{17) §5}の最後から二つ目のパラグラフの例文との比較は興味深い。

¹⁸⁾ 他動詞 'say' は例文にも示したような, さきに 'then' などの項で述べた一つの fomnula であると考えて, 別枠にすると, 他動詞の数は0となる。

なお前項§27の副詞句に掲げた数字を見れば,転倒の条件が非常によく似かよっていることに気付く。これは,次の例文にも見られるように,'接続詞+副詞句'の形に書き直すことのできるものが大部分であるからだ,と思われる。

- (1) 転倒例: pe Cite that is in pe north, where as is no mercy, but grete sorowe and care (20)/a foreste, in the which is a passing feire ladye(114)/Pe place wher comithe oute iiij. frogges is the body of man, froo the which comithe iiij. qualites of humours, by the whiche iiij. sett together, pe ymage of pe body is dissoluid (111)(混合例)/the havene of the citee wher as dwelte hir modr (257)/The wyndowe at pe which enterith lighte(267)/the wey of penaunce & of fastyng; of pe which wey seith the Apostill, ¶ stricta est via ... (42) (同様の例, テキスト 126頁)/a philosopher, to whom weer I-putte iij. sonys of a grete kyng, to be enformid (108)
- (2) 非転倒例: the castell, wher as the body is of the Emperoure (254)/a crye of Torment, for the whiche cry many knyghtes come thidir to the cite. (96)/the door opyn, by pe which a ber entryth, scil. pe devill (267)/ Emperoure tolde hir in certeyne whoo was hir childe, wher thorow she was gladde (238)/gaderid frewte, & ete, thorow the whiche he was made a foule lepre. (189)

§29 接続詞 'ne' が頭位にきて転倒する例は1件, 非転倒は7件で, 非倒置の方へ圧倒的な傾きがあることは明らかである。前者では,主語に代名詞,動詞は他動詞である。後者では,代名詞2,名詞1,自動詞1,他動詞2,複合動詞形は4件(代名詞2,名詞2)である。代名詞主語,他動詞の場合,または複合動詞形で非転倒に向うと言えよう。ただし,この転倒例では, 'ne we と続くことにあるためらいがあったのではないかということ, ne wite>nite, ne wiste>niste, ne wot> not のような,一つの熟した語ととられる音の連続を避けようとしたのではないか,と考えることもできる。

- (1) 転倒例: we sette not bye oper hevene, ne rekke we how long we bide in such derknesse of synne, and of thraldom;" (14)
- (2) 非転倒例: they come neuer oute agayne, ne non of hir frendes myght know where they bicome (112)/she had no mater to playne, ne sopefastnesse had no cause to pleyne (135)/he come, and towchid not the shelde of the fadir ...; Ne he towchid not

the shelde of the holy gost (236)

§30 接続詞 'than' の導く節内で起こる転倒例は1件, 非転倒は13件である。 前者では名詞主語, 代動詞であり, 後者は代名詞2, 名詞1;自動詞2, 他動詞1, 代動詞4(代名詞3,名詞1), 複合動詞形6(代名詞4,名詞2)である。後者の代動詞 do 4件のうち 3件が代名詞主語をもっていることから判断して, 代動詞が名詞主語を伴うときに転倒の可能性があると言えよう。複合動詞形の場合は, もちろん非転倒に向うことになると言える。

- (1) 転倒例: pe deflouryng of this maide greved the emperour more than did the ravisshing and withdrawing of her (42)
- (2) 非転倒例: pere was non that yaf better Counseill than the yong knyght did (45)/hit ... did mor harme than he dude afore (148)/I love the dowter ..., mor pan ye wolle trowe (160)/he ... wold be moore than his syr was (311)

§31 最後に扱うのは、接続詞ないし関係詞としての'as' の導く節内における語順である。とのような節内でも必ず非転倒の語順をとる次の意味・用法のものは、ひとつの型であるから、算入しないことにする。(1) 「…のとき、…しながら」。(2)as…(al)so の相関節。(3) 「あたかも…のように」(4)関係詞の場合で such … asとなっている場合。 (5) as often as …, as long as …, as soon as …の節。

さて以上を除いた残りに見られる転倒, 非転倒は, それぞれ50件, 157件である。 これを (1) 「…のように」「…のままに」 (46:132) と (2) as … as の比較節 (4:25), の二つの場合に便宜上区分して見てみたい。(1)まず複合動詞形は転倒に 1件 (名詞 1) 非転倒には25件 (代名詞23, 名詞 2) あるので除いてみると, 表17のようになる。括弧内は転倒・非転倒例の内, 名詞主語と用いられている件数である。

表 17

	転 倒	非転倒
代名詞	1	58
名 詞	44	49
代動詞do	27(27)	26(5)
助動詞	3(2)	4(1)
be	7(7)	15(6)
特定の他動詞	8(8)	15(15)
その他の動詞	0	47(22)

この表について、まず、「助動詞」とあるのは、先行する文脈からその省略されている本動詞が推測できるものをいう(転倒例では will 1, be 2; 非転倒例では might, ought, shall, should 1件ずつ)。「be」とは、欠けている主格補語が先行の文脈から推測できるものも含める。「特定の他動詞」とは、'say'と 'witness'をいい、転倒例・非転倒例に共通に見られるもので、比較の都合上、別にしたものであり(前者・後者共に witness は 1件ずつで、他は全部 'say'が占める)、そしてこれら

は聖書や聖人の言葉を引用するのに用いられている。「その他の動詞」は、転倒例中に対応する

ものがない動詞をひっくるめたものであり、代名詞主語では自動詞17、他動詞8、名詞主語ではそれぞれ11である。

この数字でわかることは、代名詞主語はまず100%近く非転倒に向うこと、名詞主語ではほぼ同じくらいの割合を両語順が占めること、また動詞については、代動詞 do が両語順に同じ割合であること、「be」も「特定の他動詞」も非転倒の方に割合が傾いていること、である。しかし聖書などの語句を quote するときの「特定の他動詞」による語順の大勢が §16の 'therefore' の場合とは逆であるのは何故か、という疑問は残る。

(1) 転倒例: perfor, man do as dyd pe knyte(7)/per is no iogoloure pat can make me so fast lawe, as woll my sone(46)/pe serpent stirte in to it, and was drawyn vp as were pe oper (283)/many ben vnkynde, as was pe pefe that deceivid pe lady(321)/By the wif ... is vndirstond the flesshe ...; as seith the Appostill paul, Datus est michi ...(48)/he yede ...; mevinge, as is manner of playe, that ...; and perfor, as costom was, a clene virgine shulde arme him. (236) (混合例)/prelatis of holy chirche, as ben prechours, and confessours (16)

非転倒例: if he be sory for his synnys, as blind men ben for hire dorknesse, he shall have ...(36) if pou sey soth, as pi felaw dede, ywis pou shalt ...(73)/he ... askid a devorce, as the lawe wolde (176)/may ye drinke of the same cuppe pat I am to drynke, scil. suffre passion as I shalle (205)/hit is of hem as hit is of a man that lokith in a mirrour (58)/as lawe was, he yafe iij. strokes on the yate (104)/he ... & is ouercome with the devil; as the spostle seithe, Nullum Opus ...(126)/he berith hem as ..., or as men berith poudir in pe wynde (42)/but she, as a goode woman shulde do seide ...(312)

次に(2)であるが、転倒、非転倒、それぞれ4件と25件である。複合動詞形は前者にはないが、 後者には6件(代名詞3,名詞3)ある。これらを除いてみると表18のようになる。括孤内の数 字は表17におけるのと同じものを示す。

「be+C」とは(1)における「be」と異なり補語が表現されているもの,「その他の動詞」は自動詞 enter で,これも「be」同様,主格補語が先行文脈から推測されるものであるが,一応別にした。

この表から、主語については、代名詞は、(1)と同様 100% 非転倒であるが、名詞は転倒への傾きがきわめて大きいと言わねばならない。代動詞 do や「助動詞」が転倒例には全く見られない

	det 1751	ulla dem 1751
	転 倒	非転倒
代名詞	0	17
名 詞	4	2
代動詞do	0	4
助動詞	0	5
be	3	1
be + C	0	6(1)
have	1	2(1)
その他の動詞	0	1

表 18 ことは、これらがみな代名詞主語であるところに理由があると思われる。例えば as much as did he (will he) という語順は避けていることになる。「be」が転倒例に多いのは、名詞主語のせいで、 as ... as is (was, etc.) +名詞の語順を好むと言えよう。事実非転倒の例は代名詞主語なのである。「be+C」であるが、補語の表現された be は、 as ... as is (was, etc.) + 主語 + 補語 (worthy, good, etc.) という語順をとらないことになる。「have」が非転倒に 2 件あるが、1 件は代名詞主語であるからだろうし、残りは名詞主語であるが have need of という動詞句になっているから転倒しないと思われる。

(41)/yf ther be eny sorowe as is my sorowe (223)/heven was fro helle as moche as is a sighyng fro pe hert (65) 非転倒例: "doughter, how moche lovist pou me;" As moche forsooth," she said, "as I do myself." ... he seid to the thrid doughter, "how moche lovist ... me?" "Forsoth," quod she, "as moche as ye beth worthi, & no more." ... "doughter, thou shalt not be maried so richely as pi sustris beth." (49) (リア王の話) /as moche quantite as Gwido hadde nede of to charge with his

(2) 転倒例: if ye have feith, as moche as hath pe corn of synewey

thowe wolte (162)/paide to him as muche as euer he wolde aske (246)/praied him to be ... in as moche as reason wold suffre.

asse (286)/"Aske of me," quod the knight," as muche mony as

§32 最後に、次のような例が一つだけ見出されたが、これは動詞の前に、このテキストにおいては、通常 'there' が加えられるものである。'there' がないために 'come' という動詞は頭位に立ち、'there come …' よりも生き生きした表現になっている。 Chaucer の Nun's Priest's Tale (3375 以下) で雄どりをくわえて逃げ去る狐を追いかける 場面があるが、 それを思い出させてくれる (Ran Colle oure dogge, and Talbot and Gerland/ … /Ran cow and calf, and eek the verray hogges/…)。

(43)

例: Thus as mercy & sothfastnesse wer together in strif, *come* the thirde dowter, scil. Rightwisnesse (133)...(as=when, while)

§33 以上,転倒の条件を個々の頭位に置かれる語句について単独の動詞を中心に調べて来たが,(1)とのテキストの大部分を占める非転倒のいわゆる 'Actor-Action-Goal' の語順のために,主語と動詞との間はいうまでもなく,動詞と本来副詞的な要素である目的語や補語も,できるだけ互いに近くにあってこの語順に従おうとするので,自動詞に比べて他動詞は目的語との間に主語などを介在させること (VSO) をきらって転倒にはなりにくい。自動詞(とくに 'copula' be など)は,補語が頭位にあればそれに続いて置かれて,名詞主語を従えることがかなりある。

(2)転倒の語順において、名詞主語が代名詞主語に比べて比率上多く見られるのは、そこに意味 のリズムの強弱の意識が働いているからであろう。つまり頭位の語句に強のリズムが働くのは認 められている考えであって、次の中位に他動詞でなく'copula'の働きをしている自動詞(とくに be) や代動詞が入ってくるのは、意味の weight が弱く、弱のリズムを受けることができるから である。そして次に代名詞より意味の重い名詞が来れば強のリズムを引き受けこれで強弱強のリ ズムができることになるのである。このような、意味のリズムは、単に自動詞の場合だけでなく、 助動詞が来ても同じである。複合動詞形がかなり転倒例にあるのもそのためであろう。頭位の語 句を 'H(ead)' とすれば, H―自動詞―名詞, H―代名詞―自動詞(他動詞), H―助動詞―主語 (名詞,代名詞)—動詞,H—助動詞—動詞—主語(名詞),H—助動詞—助動詞—動詞—主語 (名詞), H-助動詞-(代名詞,名詞)主語-助動詞-動詞,といった語順ができてくる。これ らは単純に羅列したにすぎず、名詞の前の冠詞も軽微ながら弱のリズムを受けもつこと、いわゆ る euphony, cacophony の問題, また, 数箇所に見られた'formula'ないし'mannerism'な どの文体の問題も残っている。(3)このテキストは、その統語法において、未だ、今日の英語と比 べてなお洗練されていない点があるが、口語体的な要素が多いためか、Chaucerなどの散文に見 られる長文は比較的少く,かなりきびきびした文の流れがあり('Moralite' は必ずしもそうとは いえない), 近代英語を思わせるのであるが, にも拘らず, 古いという感じをもつのは綴字や― 部の用語のためだけではない、転倒語順の量の大きさもそのような感じをかもし出す大きい要素 の一つであろう。後期MEにおいて、転倒も含めて他の語の配置がいかに近代化に向って流れて いったかを探る、これは肌理のすこぶる荒いひとつの試みにすぎない。